

個別の支援を要する幼児の保育方法に関する一考察

－幼児指導教室における事例をもとに－

加藤 由美¹⁾*

1) 新見公立短期大学幼児教育学科

(2017年12月20日受理)

個別の支援を要する幼児の保育方法に関して、K幼児指導教室における事例を取り上げて振り返る中で、一人一人の幼児に応じた保育方法のあり方について考察した。A児の事例では、在籍園や保護者との連携を通して、幼児の姿を多面的に捉えていくことの大切さ、B児の事例では、担当者との個別の関係性の中でB児の課題に対応することの大切さや適切な指導形態のあり方について、具体的なエピソードをもとに考察した。K幼児指導教室における事例から、個々の幼児の実態や課題に即した指導形態、活動内容、指導方法を考えていくことの大切さが窺えた。園と幼児指導教室が連携を図りながら、幼児一人一人に応じた保育方法を探っていくことが求められる。

(キーワード) 保育方法、個別支援、幼児指導教室、通級指導教室、幼稚園教育要領

1. はじめに

近年、一人一人の教育的ニーズに応じた適切な教育的支援を行うことを目的に、子どもの発達を専門的に支援するシステムが構築されつつあり、保育者も幼児の発達を見極め、個別の支援を行うことが求められるようになってきている¹⁾。

筆者はかつて小学校に設置されている通級指導教室に勤務していた。文部科学省によると、通級による指導を受けている児童生徒数は年々増加しており、平成26年度には小学校で7万5千人を上回っている²⁾。当時、通級指導教室には、ことばの教室、情緒の教室、幼児指導教室があり、筆者は、幼児指導教室の担当者として、ことばや全体的な発達の遅れ、発音の誤り、行動面、人との関わり等の面について個別の支援を要する幼児に対して、個別指導や少人数でのグループ指導を行ってきた。その中では、幼児の状態や発達段階を考慮し、興味のもてる遊びや日常生活に密着した内容を指導に取り入れてきた。本稿では、個別の支援を要する幼児の保育方法に関して、K幼児指導教室における事例を取り上げて振り返る中で、一人一人の幼児に応じた保育方法のあり方について考察する。

2. 幼児指導教室における指導目標と活動³⁾

K幼児指導教室における指導の目的は、「ことばや情緒などに障がい・問題のある幼児に対して、一人一人

に応じた指導を行い、状態の改善及び発達の促進を図ることにより、望ましい人間関係を築く力や社会生活に適應する力を育てる」ことである。指導の方針は、「幼児一人一人の実態に応じて的確な指導を行う」「在籍園や家庭、関係諸機関との連携を密にし、理解と協力を得ながら指導を行う」「幼児が適切な対応を受けられるように、広く教育相談を行う」ことである。「K幼児指導教室における指導の目標と活動」は、表1-1のとおりである。発音に誤りのある幼児の指導および言語発達や情緒発達に遅れのみられる幼児の指導について、それぞれの指導目標と内容・活動例を示した。

次に、「K幼児指導教室におけるグループ指導の年間指導計画」を、表1-2に示した。

グループ指導においては、個々の幼児がもつ特徴を理解した上で、一人一人の幼児の実態に即した活動内容、支援の具体的な方法を考え、情緒の安定、行動のコントロール、コミュニケーション能力の向上等につながっていくように指導を行ってきた。

以下、3.4.では、K幼児指導教室の通級児A児およびB児の事例を取り上げる。

倫理的配慮として、対象児の保護者に口頭にて、今後の指導の参考とするため、通級指導の内容を実践記録として公表すること、本件に関する協力の有無によって不利益を受けることはないこと、記録内容については匿名性を保持し、個人が特定されないように十分配慮を行った上で、その取扱いについては慎重を期すことについて伝え、了承を得た。

*連絡先：加藤由美 新見公立短期大学幼児教育学科 718-8585 新見市西方1263-2

表 1-1 K幼児指導教室における指導目標と内容・活動例

発音に誤りのある幼児の指導について	
指導目標	内容例
構音器官の機能の促進を図る。	口の開閉、舌や顎の動きを促す等
正しい音を聞き分ける力を育てる。	音の聞き分け、音の聞きだし等
正しい構音方法を習得する。	単音節→単語→短文→日常会話
言語発達や情緒発達に遅れのみられる幼児の指導について	
指導目標	活動例
①情緒の安定を図り、良好な対人関係をつくる。	集団遊び、ごっこ遊び、ボール遊び、サーキット遊び、風船遊び、マット遊び、手遊び、応答等
②不適応行動の軽減を図る。	
③基礎的な言語や意思伝達技能の習得を図る。	挨拶、応答、ごっこ遊び、集団遊び、ゲーム遊び、歌遊び、手遊び等
④基本的な生活習慣を身に付ける。	活動の準備や片付け、手洗い、おやつ、排泄等
⑤基本的な運動能力や協応能力を身に付ける。	【微細運動】点結び、紐通し、棒差し、手遊び、線遊び、シール貼り、はさみを使った遊び(切る、刻む)、型はめ等 【粗大運動】サーキット遊び、縄跳び、ボール遊び、リズム遊び、動作模倣、基本的な動き(立つ、座る、歩く、走る、跳ぶ、這う、転がる)等
⑥基礎的な認知力を高める(色、形、大小、数量、空間等)。	ボール遊び、玉入れ、玉取り、ボーリング、リズム遊び、ゲーム、シール貼り、型はめ、カード取り、かるた、トランプ、おやつ等
⑦集団参加の態度を育成する。	ごっこ遊び、集団遊び、ゲーム、サーキット遊び、リズム遊び、絵本・紙芝居を見る、カード取り、かるた、トランプ、応答等

表 1-2 K幼児指導教室におけるグループ指導の年間指導計画

指導目標	活動内容	1学期	2学期	3学期	
②⑤⑥⑦	○体操・駆け足 ○リズム遊び ○サーキット遊び ○ボール遊び ○縄遊び	準備・整理体操・走る(ブレイルーム・中庭・校庭).....→ 歩く・走る・跳ぶ・模倣の動き・一人で・手をつないで等.....→ 「牧場の合唱団」・「地球を回そう」・「ホットケーキパン」・「ディズニーマーチ」.....→ フープ・パー・小型ジャンプ板・マット・トンネル・平均台・巧技台等(跳ぶ・転がる・くぐる・渡る).....→ 小ボール・大ボール・大玉・だるま・起き上がりこぼし等(投げる・転がす・的当て・感覚遊び).....→ 引っ張る・縄電車をする・跳び越す・上や間を歩く・縄跳び.....→			
①②③⑤⑥⑦	○鬼遊び ○ゲーム遊び	「おおかみとこぶた」.....→「おおかみさん」.....→「あぶくたつた」.....→「おおかみと子やぎ」.....→ 玉入れ・玉集め・風船つき・フープ取り・いす取り・じゃんけんゲーム・カード取り・転がしドッジ.....→ かるた・とらんぷ・3ヒントゲーム.....→			
	○ごっこ遊び	買い物ごっこ.....→レストランごっこ.....→			
③	○応答	始めの会(あいさつ・歌・カレンダー調べ(月・日・曜日・天気)・プログラム紹介).....→ お話タイム(名前・園名・組名・担任名).....→(年齢・家族の名前・朝食・園での遊び・行事・友達等).....→			
③④⑥	○おやつ	係決め.....→ 手洗い・準備(いす並べ・机拭き・食器の用意)・片付け.....→ マナー(いすに座って待つ・あいさつ・おやつを食べる).....→			
①⑤	○手遊び	「アンパンマン」・「パンダうさぎコアラ」・「いとまき」・「ひげじいさん」・「一本橋」・「一匹の野ねずみ」・「焼き芋グーチーパー」・「グーチョキパー」・「メロンパンの歌」・「げんこつやまのたぬきさん」等.....→			
①②⑦	○絵本・紙芝居	「ごあいさつ」・「ポケットパン」・「おつかい」・ノンタンシリーズ・タンタンシリーズ等.....→			
②⑦	○特別な活動	親子遠足・おやつ作り(だんご)	親子遠足・おやつ作り(スイートポテト)	親子遠足・おやつ作り(ホットケーキ) 親子触れ合い活動	

注 指導目標の欄の数字は、表1-1の指導目標①～⑦に対応

3. A児の事例から⁴⁾

1) 対象児について

対象児：A児 5歳男児（公立幼稚園）

相談・教育歴：3歳児健診で「ことばの数が少ない」と指摘を受ける。

4歳3か月 公立幼稚園に入園。

5歳2か月 公立小学校の通級指導教室（幼児指導教室）で週1回の個別指導を開始。

初回面接時（X年3月）の様子：

- ・サ行音⇒チャ行音、ザ行音⇒ジャ行音に置換し、ラ行音とダ行音が混同している。
- ・単音節では発音できていても、会話になると不明りょうに聞こえることばがある。
- ・舌の動きがやや緩慢で、上や左右に動きにくい様子が見られる。
- ・態度面や理解面では、特に問題は感じられず、保護者も心配している様子はない。

2) 指導方針

- ・正しい音と誤った音の違いを聞き分けることができるようにする。
- ・口唇部分の運動機能の促進を図りながら、いろいろなことばを正しく発音できるように援助する。
- ・語いを増やすとともに、ことばを理解する力を育てるようにする。
- ・様々な遊びを通して、手指の動きを促すようにする。
- ・できるようになったことや頑張っている姿を認めて、自信や意欲がもてるようにする。
- ・通級手帳や連絡会、電話連絡等を通して、在籍園との連携を図り、日頃の指導に活かしていく。
- ・保護者との話し合いの時間を十分確保するとともに、家庭で気を付けて欲しいことについて具体的に話をし、連携を図っていく。

3) A児への指導を振り返って

「幼児指導教室におけるA児の主な活動内容」を表2に、「幼児指導教室でのA児への指導経過と在籍園・保護者との連携」を表3にそれぞれ示した。

教室の担当者は、既成の教材や遊具等を用いて指導を行っており、手作り教材を用いる場合も少なくない。筆者の場合は、発音指導を行う際に、遊びの中で特定の音を繰り返し発音できるように、「ことばのすごろく」を作成し、幼児と一緒に遊ぶ中で指導を行っていた。例えば、サ行音のすごろく（写真1）では、「サカナ」「サクランボ」等、ザ行音のすごろくでは、「ザリガニ」「ザル」等、それぞれの音を含む単語が描かれており、楽しく遊ぶ中で正しい発音ができるよう促していた。

このような遊びは、単に発音指導だけではなく、様々な言葉に触れたり、語いを増やしたりすることにつながり、工夫次第で園でも幼児のことばを育む遊びとして活かすことができると考える。

A児に対しては、発音の誤りの改善をめざして指導を開始したが、指導を重ねていく中で、また園での様子を知る中で新たに増えてきたA児の課題に対応するため、その都度、指導方針や活動内容を見直してきた。教室での指導を行っていく上では、在籍園の先生や保護者との連携を通して、幼児の姿を多面的に捉えていくことが大切である。それぞれの立場から捉えたA児の姿を伝え合う中で、A児に対して必要な手立ては何かを共に考え、よりよい援助を行っていくことが求められる。

4. B児の事例から⁷⁾

1) 対象児について

対象児：B児 5歳男児（公立幼稚園）

相談・教育歴：4歳6ヶ月 「気に入らないことがあるとパニックを起し、気持ちの切り替えができていない」「語いが少ない」とのことで、公立小学校の通級指導教室（幼児指導教室）で週1回の個別指導を開始。

初回面接時（X+1年4月）の様子：

- ・特定の物にこだわり、それがないと納得できないことがある。
- ・決まった質問（名前、園名等）には答えることができるが、質問の内容によっては、適切な答えを返すことが難しい場合がある。
- ・思い通りにならないことやしたくないことがあると声をあげたり、その場を離れたりすることがある。また、自分が1番になりたいために順番にこだわったり、遊びのルールが守りにくかったりする。

2) 指導方針

- ・遊びのルールや約束事を守りながら、友達と一緒に楽しく活動できるようにする。
- ・できるようになったことや頑張っている姿を認めて、自信や意欲、満足感がもてるようにする。
- ・物の名前や生活に必要なことば等を知らせ、語いを増やす。
- ・通級手帳や連絡会、電話連絡等を通して、在籍園との連携を図り、日頃の指導に活かしていく。
- ・保護者との話し合いの時間を十分確保するとともに、家庭で気を付けて欲しいことについて具体的に話をし、連携を図っていく。

表2 K幼児指導教室におけるA児の主な活動内容

X年4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
会話・さいころトーク								
口や舌の体操・ストロー遊び								
音の聞き分け								
単音節・単語練習			短文練習					
ことばのすごろく(サ・ザ行音)			(ラ行音)					
ことば遊び(ことば集め・しりとり・なぞなぞ・反対ことば・連想ゲーム等)								
			買い物ごっこ			レストランごっこ		
			鉛筆・はさみを使った遊び(迷路遊び・色塗り・工作等)					
								スリーヒントクイズ・旗揚げゲーム等



写真1 ことばのすごろく(サ行音)

表3 K幼児指導教室でのA児への指導経過と在籍園・保護者との連携

時期	幼児指導教室		在籍園・家庭でのA児の姿と援助、連携のあり方
	A児の姿	担当者の思い・援助・働きかけ	
X年4月	<ul style="list-style-type: none"> ・ストローを吸うのが難しい。 ・「ソ」音と「ツオ」音等、微妙な音の聞き分けができていない。 ・「シ」音、「ス」音については、単音節で正しく発音できるようになる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ストローや菓子等を用いた遊びを通して、口唇部分の動きを促していく。 ・正しい音と誤った音の聞き分けができるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・毎回の指導終了後には、教室での様子を書いた通級手帳を保護者に手渡すとともに、園の先生にも見ていただく。
5月	<ul style="list-style-type: none"> ・誤り音については、単音節や単語で正しく発音できるようになる。 ・教室に慣れてくるに従って、わざと担当者の指示を聞かずに行動しようとする姿が見られるようになる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・できたことや頑張っている姿をしっかり認め、自信や意欲がもてるようにする。 ・担当者との関係作りが大切だと考え、A児の思いを受け止めながら、気持ちに寄り添っていく。 	<p>(在籍園での様子:担任より)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・発音については、かなり改善されてきているが、理解が遅い(難しい)ため、個別な指示が必要な場面がある。
6~7月	<ul style="list-style-type: none"> ・サ・ザ行音は、短文でもほぼ正しく発音できるようになるが、ことばの言い訳が目立つようになる(「よこどり」→「よこずり」、「すべりだい」→「すれびだい」、「おとこのこ」→「おとろーこ」、「ちいさい」→「しいさい」等)。 ・『絵画語い発達検査』⁵⁾を実施した結果、生活年齢に比べて、語い年齢が遅れがみられた。 ・A児はグループ活動の中で指示したことが理解できにくい。周りを見て行動することが多いためか、自信のない様子が見られる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・文字に書いて見せながら、担当者と一緒にゆっくりと一音ずつ復唱することで、正しい発音が意識できるようにしていく。 ・ことば遊びやことばのすごろく、クイズ等を通して、語いを増やしていくようにする。 ・あらかじめ担当者が個人的に声かけを行い、自分から動ける場をつくることで、自信がもてるようにする。また、園の先生に対しては、周囲の幼児から認められるような経験ができるような配慮をお願いする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・A児ができるようになったことや苦手なこと(課題)について、通級手帳を用いて園の先生や保護者に具体的に知らせながら、A児のことばを育むための配慮点について伝える。また、保護者と直接話をする時間を設け、家庭での様子を聞いたり、今後の対応について話し合ったりする。
9~10月	<ul style="list-style-type: none"> ・『田中ビネー知能検査』⁶⁾を実施した結果、知的な遅れはみられなかったが、「3数詞の復唱が難しい」、「模倣によるひも通しができにくい」、「3角形をかくことが難しい」等、苦手な課題が明らかになった。 ・園での様子を自分から嬉しそうに話すが、時々吃音が聞かれるようになる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教室で発達検査を行った上で、その結果を踏まえながら、A児の課題について保護者に話をする必要がある。 ・鉛筆やはさみを使った遊びなども取り入れながら、ことばの面だけでなく、手指の動きを促す指導も行っていき。 	<p>(1学期の在籍園での様子:担任より)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・進級当初に比べて、朝のあいさつがよくできるようになり、友達との会話や教師からの問いかけに応じる回数が増えた。 ・意図的に伝言を頼んできちんと言えた時にはしっかり認めることで、自信がもてるように配慮している。 ・人の話を聞いて、自分で判断して行動することができにくく、友達と違う行動をしたり、やり方が分からず困ったりすることがよくあるので、個人的に声かけを行い、課題をクリアできるように援助した。
11~12月	<ul style="list-style-type: none"> ・これまであまり文字に興味を示さなかったが、「あ、くわがたの『く』があった。これは、のこぎりの『の』!」と進んで伝えるようになる。 ・言い誤っていたことばを、自分なりに気を付けて発音しようとする姿が見られるようになる。 ・迷路遊びや色塗り、工作などをくり返し経験する中で、徐々に鉛筆やはさみの使い方に慣れ、喜んで取り組むようになる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ゆったりと落ち着いた雰囲気の中で、自分の思いを十分に表出できるように、A児の話したい気持ちや伝えたい内容を受け止めていく。 ・進んで文字を読もうとしたり、いろいろな活動に喜んで取り組んだりする等、様々な場面でA児の成長した姿をしっかりと認めることで満足感を味わわせ、自信がもてるようにする。 	<p>(2学期の在籍園での様子:担任より)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1学期と比べて、自分から教師や友達に話しかけたり、会話が増えたりする等の成長が見られた。 ・吃音に対しては、ゆったりとした雰囲気の中で話ができるよう配慮してきた。 ・運動会で、スイングスキップやハードル等を繰り返し練習することで、できるようになった喜びを味わっていた。発表会ではシンバルや劇を頑張ることができた。

3) B児への指導を振り返って

「K幼児指導教室におけるB児の主な活動内容」を表4に、「K幼児指導教室でのB児への指導経過」を、表5にそれぞれ示した。

B児に対しては、1学期は5歳児3名で、2学期より4名でグループ指導を実施した。毎回、グループ指導後に、個別指導を行った。指導においては、B児の思いが十分満たされるように配慮しながら、遊びのルールを守ったり、ゲームで負けを受け入れたりする経験を少しずつ積み重ねることができるよう、グループでの活動に重点を置いて指導を

行ってきた。しかし、B児が遊びのルールを守りながら楽しく活動できるようにするためには、必ずしもグループ指導が第一の方法ではなく、まずは担当者との個別の関係の中で、できたという満足感や達成感、自信を積み重ね、少しずつ経験の幅を広げていくことが必要であった。そして、個別活動の中で経験したことを少しずつグループ活動に取り入れていくようにする等、指導の形態については、幼児の実態に応じて柔軟に考えていくことが大切であると推察された。

表4 K幼児指導教室におけるB児の主な活動内容

X年4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
応答・歌								クイズ
リトミック								
フープ遊び・サーキット								
ボーリング・ゲートゲーム								
絵本・卓上ゲーム・なぞり書き・迷路遊び								すごろく・迷路遊び
ことば遊び(ことば集め・しりとり・なぞなぞ・反対ことば・連想ゲーム等)								
				買い物ごっこ				レストランごっこ
				まねっこ遊び				だるまさんがころんだ
								旗揚げゲーム

表5 K幼児指導教室でのB児への指導経過

エピソード	A児の姿	担当者の思い・援助	考察等
「カブトムシ大好き」 (①→⑤)	①ごぼうシールの絵にこだわり「カブトムシじゃないといやだ！」と駄々をこねる。 ③シールがなくなってしまった時、「いやだ！」の声を上げる。 ⑤担当者の描いた絵に満足する。その後、カブトムシのシールがない時には、自分から他の絵のシールを貼ることができた。	②B児が満足できるよう、毎回カブトムシのシールを用意する。 ④シールの代わりに、担当者がカブトムシの絵を描く。	・B児のシールへの思いを十分に満たしていきながら、徐々にそれに代わる物でも受け入れることができるようにと考え、援助したことで、シールへのこだわりはそれほど見られなくなった。
「まだ遊ぶ」 (①→⑤)	①指導後、帰るのを嫌がり、遊びたいといって腹を立てて声をあげる。 ③しばらくすると気持ちが治まり、自分から母親の元に行き帰る。 ⑤タイムタイマーを見ることで、気持ちを切り替えて片付けをすることができた。	②担当者が言葉をかけると余計に感情がたかぶってしまう状態だったため、気持ちが落ち着くまでは様子を見守る。 ④B児にとっては、時間の見通しがもちにくかったと思われたため、それ以降は、「タイムタイマー」 ^{注2} を見せて、片付けの時刻を予告する。	・あらかじめ見通しがもてるように「タイムタイマー」を利用したことは、B児にとっては効果的だった。しかし、活動によっては気持ちを切り替えることができにくい場面もあったため、B児が分かりやすいように絵カード等を利用して次の行動について知らせるといった配慮が必要であった。
「～は嫌だ」 (①→②) (③→⑥)	①「歌はあるの?」「リズムは?」と毎回のように担当者に尋ね、自分の嫌いな活動を気にしている様子だった。嫌いな活動には参加しようとせず、部屋を出ていくこともあった。 ③自分の思い通りにならないと、「嫌だ!」を連発する。特に、応答場面で自分が発表できないと我慢できない。 ⑤約束事を聞くとうなずき、担当者と指切りをする。自分の番まで着席して待ったり、担当者の指示を聞いて動いたりすることができた。	②活動に参加はできなくても、友達の様子を見たり応援したりする姿を認める。また、経験の幅を広げることができるよう活動の中に歌う場面を設けるとともに、B児が興味をもって参加できる活動を取り入れ、できたことや頑張っている姿をしっかり認める。 ④活動の最初に、あらかじめ絵カードを見せながら約束事を知らせる。 ⑥B児なりに頑張っている姿を認めることで満足感を味わわせ、自信がもてるようにする。	・B児は順番に対するこだわりが強いため、1番でない我慢できないことが度々あった。対応の方法として、個々の幼児の名前カードを並べて順番を示しておき、活動ごとに入れ替えるといったやり方も考えられる。 ・B児に対しては、活動の前にはあらかじめ約束事を知らせ、心構えができるように配慮することが必要であった。
「～がしたい」 (①→④)	①鉛筆でなぞり書きをするときに、自信がなく鉛筆を持とうとしなかった。 ③鉛筆を使つての迷路遊びに自分から取り組んだり、自分の名前を書いたりするようになった。	②担当者が手を添えて書くことができるように援助した。 ④書いたプリントに花丸をつけると満足そうな笑顔になった。	・苦手な活動でも担当者が援助を行う中で、徐々に自分から取り組むことができるようになり、そうした姿をしっかり認めることで、B児の自信につながっていったと考えられた。

注1 「エピソード」の①→⑤は、「A児の姿」・「担当者の思い・援助」が①→②→③→④→⑤の順であることを示す

注2 「タイムタイマー」とは、残りの時間が一目で分かる視覚支援ツールのことである

5. 総合考察

個別の支援を要する幼児の保育方法に関して、A児およびB児の事例をもとに考察を行った。A児に対しては個別指導、B児に対してはグループ指導と個別指導を組み合わせ実施したが、それぞれの幼児の実態や課題に即した指導形態、活動内容、指導方法を考えていくことの難しさと大切さを改めて認識した。『幼稚園教育要領』⁸⁾には、「幼児の行う活動は、個人、グループ、学級全体などで多様に展開されるものであることを踏まえ、～（中略）～一人一人の幼児が興味や欲求を十分に満足させるよう適切な援助を行うようにすること」と明示されている。個々の幼児の実態に即した保育方法の工夫は、個別の支援を要する幼児の保育に限らず、通常の園における保育においても重要である。幼児指導教室での活動内容や指導方法には、園での保育に活かせるものも少なくないため、園と幼児指導教室が連携を図りながら、幼児一人一人に応じた保育方法を探っていくことが求められる。

6. おわりに

特別な配慮を必要とする幼児への指導に関して、『幼稚園教育要領』⁸⁾においては、「障がいのある幼児などへの指導に当たっては、～（中略）～、家庭、地域及び医療や福祉、保健等の業務を行う関係機関との連携を図り、長期的な視点で幼児への教育的支援を行うために、個別的教育支援計画を作成し活用することに努めるとともに、個々の幼児の実態を的確に把握し、個別の指導計画を作成し活用することに努める」と明示されている。「個別的教育支援計画」や「個別の指導計画」は努力義務規定ではあるが、できる限り専門家の助言を受け、必要に応じて保護者とも相談しながら、個別的な指導を進めると同時に、クラスなど集団での生活の貴重さを活かして、その子どもなりの参加を誘い、支えていくことが大切である⁹⁾。

謝辞

本論文への協力をご承認いただきましたA児、B児および保護者の方々に深く感謝いたします。また、個々の幼児への指導方法に関して貴重なご示唆を与えてくださいましたK幼児指導教室の先生方に心より感謝申し上げます。

文献

- 1) 渋谷郁子・小島佳子・山野栄子：生活コミュニケーション学研究所ミニシンポジウム記録「特別支援」が求められる時代における保育者の専門性とは、鈴鹿短期大学紀要34, 137-152, 2014.

- 2) 文部科学省：特別支援教育について平成26年度通級による指導実施状況調査結果. 2015.
- 3) 倉敷市立倉敷東幼稚園：計画訪問要項（平成13年10月30日）. 2001.
- 4) 倉敷市教育委員会・倉敷市特別支援教育研究協議会：平成16年度 実践記録―聴覚障害・言語障害・幼児部門一. 15-16, 2004.
- 5) 上野一彦・撫尾知信・飯長喜一郎：絵画語い発達検査（PVT）. 日本文化科学社. 1980.
- 6) 田中教育研究所編：TK式田研・田中ビネー知能検査法. 田研出版. 1970.
- 7) 倉敷市教育委員会・倉敷市特別支援教育研究協議会：平成17年度 実践記録―聴覚障害・言語障害・幼児部門一. 13-14, 2005.
- 8) 文部科学省：幼稚園教育要領. フレーベル館. 2017.
- 9) 無藤隆・汐見稔幸・砂上史子：ここがポイント！3法令ガイドブック. フレーベル館. 2017.